



2019年度 須磨学園中学校入学試験

国 語

第 2 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、
受験番号シールを貼り、受験番号と氏名を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 字数制限のある問題については、記号、句読点も1字と数えること。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

須磨学園中学校

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私は、インターネットに、「おとなの小論文教室」というコラムを長く連載している。

連載当初、私の力量では、縮めても縮めても、どうしても、A4にして7〜8ページ分の文字数が必要だった。いま、自分で読んでも長いと思う。この手の文章に熟達した人なら、一発で「無駄が多い」「短くしろ」「こういう内容を削れ」と言えたと思う。だが、まわりのだれ一人、それを言わなかった。

一回一回全力投球していくうち、やがてそれが、5ページで書けるようになり、気がつくとも3ページで書けるようになっており、ちょっとした感慨があった。連載開始からちょうど3年経っていた。

もしも、最初のころに、ネットコラムの達人が現われ、正しい助言を私にしていたらどうなっていたらどうか。ぞっとする。一時期、大量の文字数で書いてみることは、私にとってどうしても経なければならぬプロセスだった。「Ⅰ」、短く書くのに3年というのも、私にとって必要な時間だった。自分の感覚としてつかんでいけたからこそ、納得感がある。自分でつかめたということ、3年の間にコツコツと身体に刻まれた習性が、小さいけれど消えない自信になっている。

それをすつとばして、いきなり正解を教えられても、正しいから抵抗できず、でも3年かかったことを、すぐやれるはずもなく、「わかっているのにどうしてできないんだ」と自分を責めたらう。仮に正しい助言にそって、3年が1年に短縮できたとする。でも、身に刻まれた習性は浅く、それは自分で編み出したものではないから、困った時はまた正解をほしがり、人をあてにする。そこにはもう、失敗をする自由さえない。

人は、自分でつかんでいきたい生きものなのかもしれない。なぞなぞで、もう少しで答えがつかめそうなとき、正解を言われたら、相手を怨むだろう。謎解きをするときのぞくぞくする感じ、わかったときの、頭にパツと電流が走り、すつと腑に落ちる爽快感。

正論を拒むのは、人間の本能かもしれないと私は思うようになった。正論は強い、正論には反論できない、正論は人を支配し、傷つける。人に何か正しいことを教えようとするなら、「どういう関係性の中で言うか?」を考えぬくことだ。それは、正論を言うとき、自分の目線は、必ず相手より高くなっているからだ。

教えようとする人間を、好きにはなれない。相手の目線が自分より高いからだ。そこから見下ろされるからだ。そして、相手の指摘が、はずれていけば、それくらいわかってる、バカに

するなと腹が立ち、相手の指摘があたっていれば、自分のヒが明らかになり、いつそう腹が立つ。

「Ⅱ」、学校で、生徒は先生にしょっちゅう腹を立てているのかというところではない。それは、「教えてください」という生徒がいて、互いの合意の上で上下関係ができていくからだ。望んでもいない相手に、正論をふりかざすのは、道行く人の首根っこをつかまえるような暴威だ。まして、あなたとタイトウでいたい、あなたより立場が上でいたい、と思っている相手なら、無理やりその座から引き摺り下ろし、プライドを傷つけ、恥をかかせる。

「Ⅲ」、相手は、あなたの言っていることのコウノウを理解するよりずつとはやく、感情を害してしまう。理性より感情の方が、ずっとコミュニケーションスピードが速い。相手は、あなたを「自分を傷つける人間だ」と警戒する。正論をかざすことで、あなたの相手にたいする「メディア力」は下がってしまふ。

先にメディア力ありき、相手は、そういう人間からの言葉を受け入れない。だから、あなたの言う内容が、どんなに正しく利益になることでも、なかなかうまくことが運ばないのだ。

言葉は、関係性の中で、相手の感情に届く。

(山田ズーニー『あなたの話はなぜ「通じない」のか』による)

一の設問

問一【Ⅰ】・【Ⅱ】・【Ⅲ】に入る語として最も適当なものを後からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 【Ⅰ】 1 つまり 2 ただし 3 たとえば 4 また
- 【Ⅱ】 1 かつ 2 むしろ 3 では 4 なお
- 【Ⅲ】 1 やはり 2 なぜなら 3 だから 4 しかし

問二「ぞっとする」(——線部ア)とありますが、筆者はなぜ「ぞっとする」のですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 やり方を自分で編み出すことなく、教えてもらった方法しか身につけることができないかたよった人間になってしまったであろうから。
- 2 できないということを自覚せず、助言に納得できないと助言者を逆恨みしたり、むやみにあてにすることに

なったりするだろうから。

- 3 失敗を恐れて自分なりのやり方を探そうと試みることもなく、自分のやり方より助言の方が正しいと納得する習性が身につくとき、それが自信に変わっただろうから。
- 4 自分の力不足を責めたり、自分に自信が持てずすぐに人をあてにしたりして、自分に適したやり方を自分でつかむ機会を失うことになっただろうから。

5 助言者の習性が身につくまで何度もやり直しを求められ、大量の文字数で書くという全力投球の努力が無駄になっただろうから。

問三「プロセス」(~~~~線部A)、「プライド」(~~~~線部B)の外来語の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- A 1 計画 2 過程 3 収集 4 経験
- B 1 優越感 2 使命感 3 向上心 4 自尊心

問四「教えようとする人間を、好きにはなれない」(——線部イ)とありますが、これは筆者が人間をどのようなものだと捉えているからですか。それを示している部分を解答欄に合うように十五字で書きぬきなさい。

問五「望んでもいない相手に、正論をふりかざす」(——線部ウ)ことの例として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 学校で先生が、授業に集中していない生徒やまちがった答えを書いた生徒を個別指導すること。
- 2 映画館で映画の上映前に携帯電話の電源を切ることや録画、録音は禁止だという放送が流れること。
- 3 合唱祭の早朝練習にこないクラスメイトに、クラスの一人として練習に参加するのは当然だと説くこと。
- 4 新入社員に仕事上でわからないことがあれば、必ず先輩に相談するようにと社長が言うこと。
- 5 プロ野球の試合で監督が相手投手の調子を観察し、打者に打ち方を指示すること。

問六「言葉は、関係性の中で、相手の感情に届く」(——線部エ)とありますが、言葉を相手の感情に届くようにするためにはどうすればいいのですか。本文に即して、八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。(句読点も一字として数える。)

問七 線部a、b、cのカタカナを漢字で答えなさい。

- a ヒ b タイトウ c コウノウ

二

次の文章は、一九八〇年に台湾に生まれ、三歳で日本に引越した筆者自身の話です。これを読んで、後の設問に答えなさい。

一九八五年の春のこと。

赤ん坊の妹が人として最低限の欲求を、まだ何語でもない泣き声で力を尽くしながら愛嬌たっぷりに主張する日々のなか、母や父が妹にかけているのとは別のコトバをわたしは大急ぎで覚えなおしていた。そうしなければ、ガッコウという新世界の仲間に加わることができない。どうしてだかガッコウでは、小さいときからずっと耳にしていたのとは明らかに異なるコトバがいつも響いていて、自分もそのコトバをつかわなければ、先生にも隣にいる子にも気持ちがつうじないのだ。

……わたしの日本語は、妹が歩きはじめる頃になると、【①】上達していて、ガッコウで不自由を感じる機会は以前よりも少なくなった。字が書けるようになったのもこの頃だ。

両親はもちろん、おじたちや父と一緒に働いていた大人たちは、ガッコウ——この頃にはもう実際に「学校」だった——で教わった文字を、すらすら書くわたしを褒めた。台湾人の彼らには、特にカタカナは日本語の文字の内でも最もややこしく、正しく読みあげることほもちろん、書くとなると更に大変

な苦労が必要だったのだ。台湾人にはあるけれど、「国語」として日本語を学ぶわたしは、自分のまわりにいた大人たちが「外国語」としてそれを学ぶときのような苦労をほとんどせず済んだ。それもそのはず。当時のわたしは、文字なるものを一つも知らなかった。「あ」は、ア。「ん」は、ン。文字の形と音が、清々しいほどなめらかに結びつく。五十音を完璧に覚えてしまうと、いつもは声を発したとたん、消えてしまうコトバが、文字を書くことよって紙の上にあらわせるのが、面白くてたまらなくなる。

小学校低学年の頃、担任の先生に宛てて日記を書くという課題があった。「せんせいあのね」という文章からは始めるのが決まりなので「あのね帳」と呼ばれていた。わたしは、ひらがなとカタカナ、少しずつ覚えはじめた漢字をまじえて、「あのね帳」を書くのを思いきり楽しんだ。自分が書いた文字でノートの升目がどんどん埋まっていくことが心地よかった。頭に浮かぶコトバが消えてしまわないように、大急ぎでえんぴつを動かした。ほとんど、書く呼吸のリズムに合わせて読点を打っていた。

小学一年生のときの「あのね帳」を捲ると、こんなふうにある。

——わたしは、きょう、本を、かいました。あと、コーラを、かいました。いもうとと、のみました。おわり。

読点だらけのわたしの作文に「とてもたのしいじかんだったんだね」と赤いサインペンで寄り添う文字には優しさが滲んでいる。書く行為じたいが楽しかったのはもちろんだけれど、きつとわたしは、当時の担任だったK先生からの「お返事」も嬉しくて、あんなにも「あのね帳」を書くことに夢中になったのだろう。

——文章を書くときは、一言ずつ「」を打たなくてもいいのよ。

と教えてくれたのはK先生だ。考えてみれば、このK先生から教わった「こくご」が、わたしの日本語の入り口だったのだ。当時、外国出身の児童は今ほど【②】ではなかった。K先生が受け持つ「一ねん二くみ」は、わたし以外の同級生は全員、日本人だったはずだ。少なくとも外国人とわかる姓名を名乗っているのはわたしだけだった。

「あのね帳」に限らず、「こくご」の課題に嬉々として取り組むわたしに、台湾人である両親、もしかしたら日本人のK先生も、何かしらの感慨を抱いていたかもしれない。

わたし自身は、書くことがただもう楽しかった。そして、文字とは、日本語をあらわすためのものだと信じ込んだ。たとえば、「還在睡覺！ キンキヤイ」という母のコトバを、誰に言われるでもなく、「まだねてるの、はやくおきて！」と頭の中で置き換える。まるで「翻訳家」のように、母の放つ中国語や台湾語を日本語に「整えて」から、「書く」のだ。おかげで、わたしの文の中にあられる母は、本物の母よりもずっと日本語が【③】だった。

文字を得たわたしの日本語は、先住言語である中国語と台湾語を強気でおしのけ、わたしの中心に居座ろうと目論んでいた。
(温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』による)

二の設問

問一 【①】～【③】に入る語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 【①】
- | | | | |
|--------|------|--------|-------|
| 1 ちょうど | 2 さぞ | 3 すっかり | 4 たぶん |
|--------|------|--------|-------|
- 【②】
- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1 友好的 | 2 一般的 | 3 合法的 | 4 現実的 |
|-------|-------|-------|-------|
- 【③】
- | | | | |
|-------|-------|------|------|
| 1 感動的 | 2 論理的 | 3 早口 | 4 流暢 |
|-------|-------|------|------|

問二 「別のコトバ」(——線部ア)とは何ですか。本文中から五字以内で書きぬきなさい。

問三 「ガッコウ——この頃にはもう実際に「学校」だった」(——線部イ)とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「ガッコウ」とはどういうところかを理解していなかった三歳の頃とは違い、通学する年齢になった時には「学校」が、文字通り学ぶところだとわかったということ。筆者が最初に覚えた「学校」という漢字を周囲の大人たちがほめてくれたことが、一番の思い出になっているということ。
- 2 発音だけで「ガッコウ」という語を使っていた頃と違い、小学生になる頃には語の意味を理解しなければ使えない漢字も習得したということ。
- 3 外国出身の児童が日本人の子どもと一緒に学ぶ場所を「ガッコウ」と記し、外国人の大人が日本語を学ぶ場所は、「学校」と言っているということ。
- 4 昔は外国出身の人にはわかりやすく「ガッコウ」と書いていたが、現在は日本を訪れる外国人観光客も増えたので、漢字で「学校」と書くようになったということ。

問四 「国語」(——線部a)、「こくご」(——線部b)の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「国語」は「身近な教科としての国語」を示し、「こくご」は「話し言葉」を示している。
- 2 「国語」は「翻訳語」を示し、「こくご」は「日本語」を示している。
- 3 「国語」は「外国語」を示し、「こくご」は「身近な教科としての国語」を示している。
- 4 「国語」は「母語」を示し、「こくご」は「身近な教科としての国語」を示している。
- 5 「国語」は「母語」を示し、「こくご」は「日本語」を示している。

問五 「書く呼吸のリズムに合わせて読点を打っていた」(——線部ウ)とありますが、それはなぜですか。本文中の語句を使って五十字程度で説明しなさい。

- 問六 「もしかしたら日本人のK先生も、何かしらの感慨を抱いていたかもしれない」(——線部エ)とありますが、ここでの「先生」の心情の説明として最も適当だと考えられるものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 日記を書くという単純な作業にもかかわらず、毎日欠かさず日々の記録を書くことで、日本になじもうと努力する筆者をいじらしく感じていた。
 - 2 日本語を習得できない周囲の大人たちの苦勞を目の当たりにしている筆者が、そのつらさを忘れようと楽しいことだけを日記に書いているのがかわいそうで仕方なかった。
 - 3 たどたどしい日本語しか書けない外国出身の筆者に同情し、ほめることでやる気を出させ、早く日本語を習得し学校生活になじめるようにしてやりたいと思っていた。
 - 4 楽しそうに課題に取り組む筆者の姿に好印象を持っているが、内容や書き方に間違いが多すぎるため評価が低くなってしまふことを残念に感じていた。
 - 5 母語ではない言葉を、「あのね帳」や「こくご」の課題を通じて楽しそうに獲得していく幼い筆者の成長を愛らしく感じていた。

問七 「わたしの中心に居座ろうと目論んでいた」——線部オ)

とありますが、何が、どのようになることですか。その理由も含めて八〇字程度で、わかりやすく説明しなさい。(句読点も一字として数える。)

↓ここにシールを貼ってください↓



受験番号			

氏名	
----	--

2019年度 須磨学園中学校 第2回入学試験解答用紙 国語

(※の欄には、何も記入してはいけません)

※	※	※	※	※	※	※	※
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	一
c b a				A		I	
				B		II	
				15 だと捉えている。		III	
	100 90 80 70 60 50 40 30 20 10			10			

※

※	※	※	※	※	※	※	※
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	二
						①	
						②	
						③	
85		55					
80 70 60 50 40 30 20 10		50 40 30 20 10					



※

※